

小学校中学年の体育授業におけるティーボールを用いた打撃動作習得のための 指導プログラムについての検討

A study on the program to acquire the batting using teeball in the fourth grade of elementary school

1K05B065

神谷 雄毅

指導教員

主査 吉永武史先生

副査 木村和彦先生

<緒言>

平成 20 年 3 月に告示された新しい学習指導要領では、小学校中学年ならびに高学年のボールゲームの内容が、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の類型で示された。この改訂により、学校現場では多様なベースボール型ゲームを採用することが可能になったが、これまでの小学校中学年におけるベースボール型ゲームの授業ではハンドベースボールやキックベースボールの採用が多く、投球動作や捕球動作などの技術は習得され、打撃動作の技能を高めることができなかった。

そのため、高学年のソフトボールになると、「投げられたボールを打つ」という技術的困難さから、ある程度の技術を習得した児童でなければゲームの楽しさを享受することができないという問題が生じていた。さらに、小学校の体育授業を対象とした打撃動作の指導書やマニュアル本はほとんどみられないことや、ベースボール型ゲームを専門としない教師にとって、打撃動作を適切に指導することは決して容易ではなく、小学校の体育授業を対象とした打撃動作の指導プログラムの開発もほとんどみられない。

そこで本研究では「止まっているボールを打つ」技術的要素を備えたティーボールを採用し、小学校中学年のベースボール型ゲームにおいて打撃動作を習得するための指導プログラムについて検討した。

<本研究の方法>

小学校 4 年生を対象にティーボールの授業(7 時間の単元構成)を実施した。実験授業では、打撃動作に関わる指導内容を児童に明示し、スイングの重要な構成要素である「腰の回転」や「フォロースイング」を意識させることを主目的としたドリルゲームや、学習者同士で打撃フォームを観察し合う相互評価を組み込んだ課題練習などによって指導プログラムを構成した。そして単元前後には打撃テストを行い、打撃フォームと打球飛距離の観点から分析を行った。また本研究は、体育授業という条件のもとで実施するため、体育授業に対する愛好的態度や、授業中の友達との協力なども考慮に入れなければならない。そこで、本実験で行った指導プログラムを児童に直接評価してもらうために、単元前後に「診断的・総括的授業評価」を、毎時間ごとに「形成的授業評価」を実施した。

<本研究の結果>

打撃テストにおけるフォーム得点では、「構え」、「ステップ」、「スイング」の 3 項目全てにおいて、クラス全体で平均点を伸ばした。特に女子の「構え」、「ステップ」における打撃フォーム得点が顕著に伸びた。児童の打撃飛距離の比較については、クラス全体平均で 5.54m、男女別で男子が 8.15m、女子が 2.98m 打球飛距離を伸ばした。この指導プログラムが児童の打撃動作能力を向上させた事が明らかとなった。さらに、授業評価の結果においても学習者である児童が単元を実施していくうちに学習の成果を実感するようになり、打

撃動作能力をさらに向上させようとする自主性が高まるといった良い学習のサイクルが形成されていたことがうかがえる。特に男子は強くより遠くにボールを飛ばすために時間外でも練習をするようになり、女子はバットでボールを打つという運動経験が少ない中、見様見真似で授業に取り組んだ。その中で打つことができた喜びを感じ、比較的運動を苦手としている女子にも受け入れられる結果となった。

< 摘要 >

「止まっているボールを打つ」ことであれば、小学校中学年レベルでも打撃動作を習得することが可能であることが明らかになった。そこで今後は、上記の研究成果を踏まえて、小学校高学年レベルにおいてさらに難易度の高い「動いているボールを打つ」打撃動作を習得させるための指導プログラムを作成し、その有効性について検討する必要がある。今後さらにゲームパフォーマンスの向上が可能となり、誰もがベースボール型ゲームの楽しさを享受できる学習指導プログラムの開発されることを期待し、本研究のまとめとする。